EN（絶滅危惧ⅠB類）

コイ目　コイ科

カテゴリー判定基準：B-2, 3

旧レッドリストカテゴリー		
1991	1999	2007
—	—	**VU**

ツチフキ

Abbottina rivularis (Basilewsky, 1855)

カマツカ (*Pseudogobio esocinus*) に似るが、より太短く小型である。西南日本から朝鮮半島、中国東部にかけて平野部の水田周りの池沼や農業水路をおもな生息場所としている。圃場整備事業にともなう生息環境の悪化、都市化による生息地の消滅、およびオオクチバスやブルーギルの移殖により、各地で減少している。琵琶湖・淀川水系では絶滅寸前にまで追い込まれている。

Abbottina rivularis is a typical bottom-dwelling cyprinid, widely distributed in freshwaters of Far-eastern Asia, including the western part of the Japanese Archipelago. This small gudgeon is quite unique as it occurs in such lentic waters as ponds, pools, and irrigation canals in flood plains, and has peculiar spawned eggs coated in jelly-like matter. The range of this species has been seriously reduced, particularly in the Lake Biwa/Yodo River basin in recent years.

基礎情報

■形態　最大全長10cm。体は細長く、前部が縦編、後部が側偏し、コイ科カマツカ亜科に属する底生魚で外観はハゼを思わせる。吻は長くとがる。口は小さく、吻端の下方に開き、口角には1対の短い髭がある。眼は高い位置にある。背鰭の鰭条数はiii, 7。本種は、小型で体形が太短く、背鰭が張り出し、下唇の肉質葉の乳頭突起が発達しないことでカマツカ (*Pseudogobio esocinus*) と区別できる。

■分布域　東アジアを中心に分布するが、東南アジアの一部にも移殖されている。日本、アムール川から閩（みん）江までの中国、朝鮮半島に分布する。日本国内では、濃尾平野、近畿地方、山陽地方、九州地方北西部が自然分布域。宮城県、新潟県、関東平野にも移殖されている。

■生息環境　本種は平野部の水田周りの池沼や流れのない農業水路に多く見られ、砂泥底をおもな生息場所としている。カマツカに比べて、いっそう泥の多い底質を好む。

■生活史　一生を止水域で生活する。雑食性で、ユスリカ幼虫、イトミミズ、デトリタス、浮遊動物、付着藻類などを摂食する。産卵期は4〜6月。卵は沈性粘着卵で、最大径2.5〜3.0mm、寒天質様の物質を多量に含む。卵はすりばち状の巣の中で1尾のオスによって保護される。受精後、5〜6日で孵化する。仔稚魚には明瞭な浮遊期がない。満1年で5〜8cmに成長するが、メスよりオスの方が大きくなる。雌雄とも多くは2年で成熟する。

現在の生息状況

■分布域の現況　近年の調査結果から、国内の自然分布域内での減少が著しく、琵琶湖・淀川水系では絶滅寸前であることが明らかとなった。

■生息地の現況　どの生息地においても生息環境の改善は見られない。

■個体数の現況　個体数変動を把握することは難しいが、もともと分布が不連続なうえ、依然、地域的な絶滅が進行しており、種全体の総個体数は減少しているものと考えられる。

存続を脅かす要因

おもな減少要因として、圃場整備事業にともなう水路のコンクリート護岸・改修（15-2）、溜池の管理放棄（12）、宅地開発など都市化による生息地の消失（23）、オオクチバス (*Micropterus salmoides*) とブルーギル (*Lepomis macrochirus macrochirus*) による食害（52-3）が考えられる。

保護対策の現状

とくになし。

特記事項

体が小さく、寒天質卵を生む点でゼゼラ属 (*Biwia*) に似るが、頭部骨格の構造からカマツカにもっとも近縁であることは明らかである。なお、中国で従来ツチフキ属 (*Abbottina*) に分類されていたものは、いずれもコブクロカマツカ属 (*Microphysogobio*) 、または近縁な別属の種である。

参考文献

Hosoya, K., 1986. Interrelationships of the Gobioninae (Cyprinidae). In: T. Uyeno, R. Arai, T. Taniuchi and K.Matsuura (eds.), Indo-Pacific Fish Biology, pp. 484-501. The Ichthyological Society of Japan, Tokyo.

細谷和海，2013．コイ科．中坊徹次（編），日本産魚類検索：第三版，pp. 308-327, 1813-1819．東海大学出版会，東京．

川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），2001．日本の淡水魚：第3版．山と渓谷社，東京．720pp.

執筆者：細谷和海（近畿大学大学院農学研究科）